

1. 研究例会

第 50 回 「会話における『不必要な』要素を教える必要」

ハドソン遠藤 睦子氏 2005 年 5 月

第 51 回 「Multiple-Grammar Hypothesis:会話と社説における日本語の受身
使用方法と母語話者の文法体系」

岩崎 勝一氏 2005 年 12 月

第 52 回 「〈ラウンドテーブル〉 テレビドラマを用いた中級の授業－方法と課題－」

宮崎 幸江氏

小松 満帆氏 2006 年 2 月

2. 教員研究活動報告（2005 年 4 月～2006 年 3 月）

半田 淳子

研究論文

1. 「20 世紀の『時間』意識：夏目漱石と村上春樹」（初出『専修人文論集』2002 年 10 月）『村上春樹スタディーズ 2000－2004』2005 年、若草書房、pp.186－204
2. 「オーストラリアの日本語イマージョン教育」『ICU 日本語教育研究』2、ICU 日本語教育センター、2006 年 3 月

研究発表

1. “Murakami Haruki: His Cross-Cultural Experience in the West and the East,” The Ninth Annual Asian Studies Conference Japan, 18th June, 2005, Sophia University, Ichigaya Campus, Tokyo, Japan
2. “A School Girl who Showed Inner Contentment was Subjected to Bullying (いじめを挑発する少女の中の大人),” The 14th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia, 6th July, 2005, The University of Adelaide, Australia

報 告

1. 「企画の趣旨」『教育現場からの日本語教育実践フォーラム』予稿集、p.66
2. 「海を渡った『赤い鳥』鈴木三重吉七十回忌に寄せて（今も幅広い愛読者、米・豪などの日本語教育に力）」『中国新聞』2005 年 8 月 9 日、17 面

その他

1. ラウンドテーブル D「学習者による評価」教育現場からの日本語教育実践フォーラム、2005 年 8 月 6 日及び 7 日、早稲田大学
2. 講演「海を渡った赤い鳥－三重吉の心を現代に」鈴木三重吉 70 回忌法要・記念講演会、2005 年 6 月 5 日、広島市長遠寺

日比谷 潤子

著 書

1. 日比谷潤子・平高史也（編）『多言語社会と外国人の学習支援』慶應義塾大学出版会、2005

研究発表

1. "The velar nasal in Japanese: an analysis of CSJ", 12th International Conference on Methods in Dialectology, University of Moncton, August 2005
2. "Language shift in Canada: Aspects of a language contact variety in its social context" John F Kennedy Institute for North American Studies, Freie Universität Berlin, November 2005

廣瀬 正宜

(2005年9月～2006年8月 特別研究期間中)

中村 一郎

なし

根津 真知子

研究論文

「教員養成課程における実践能力の育成と教育実習のあり方をめぐって」、『大学日本語教員養成課程における実践能力の育成と「教育実習」のあり方をめぐって』、大学日本語教師養成課程研究協議会、2004年5月、pp12-18

佐藤 豊

報 告

1. 「日本語教育とサービス・ラーニング」『サービス・ラーニング入門』サービス・ラーニング研究シリーズ1、2005年、国際基督教大学サービス・ラーニング・センター

事 典

1. 「言語生得説」『新版日本語教育事典』2005年、大修館書店

座談会

1. 国立国語研究所主催 平成17年度「目的別・課題別の研修に関する研修報告資料」作成のために外部専門家から意見を伺う会（第2回）2005年12月19日（上野田鶴子、西原鈴子、水谷修、坂本正、今泉喜一、吉村弓子、佐藤政光、佐藤豊）

平田 泉

報 告

「日本語教育プログラム 上級書き方」『FD Newsletter』 Vol. 10, No.2, International Christian University, Nov. 2005

尾崎 久美子

なし

小川 貴士

(2005年9月～2006年8月 特別研究期間中)

鈴木 庸子

論 文

1. 「新書の文章における「ようだ」の用例についてー日本語教育の観点から」『國文目白』44、2005、pp.27-39
2. 「日本人学生と留学生の交流と国際理解教育ー授業外活動「ZADANKAI」の意義ー」『J L E M10周年記念論文集』Cultural exchange between Japanese and overseas students and international education: The significance of outside the classroom activities of ZADANKAI, *Papers of the Japanese Language Education Methods* 2005 pp.30-41
3. 宮崎幸江・鈴木庸子「JLPにおける接触場面としてのビジターセッションー日本人ビジター・留学生は何を学んだかー」*Language Research Bulletin* 2006 pp.37-49

報 告

1. 「2005年ICU夏期日本語教育 教務報告」『ICU日本語教育研究』2、ICU日本語教育センター、2006年3月
2. 宮崎幸江・鈴木庸子「中級クラスにおけるビジターセッション」『ICU日本語教育研究』2、ICU日本語教育研究センター、2006年3月

事 典

1. 「フィードバック」『新版日本語教育事典』2005年、大修館書店

研究助成金

1. 2005年度ICU研究助成基金補助金 “Development and Evaluation of Japanese E-Learning Programs for Academic Professionals : Adopting a Constructivistic Approach” (研究代表者 鄭仁星教授)

小澤 伊久美

研究論文

1. 「日本語教育における教師の実践的思考に関する研究 (1) - 新人教師とベテラン教師の授業観察後のレポートの比較より -」(坪根由香里・嶽肩志江との共同執筆)、『語学研究』Vol.20, ICU Division of Languages, English Language Program and Japanese Language Programs, 75-89 頁, 2005
2. 「日本語教育における教師の実践的思考に関する研究 (2) - 新人教師とベテラン教師の授業観察時のプロトコルと観察後のレポートの比較より -」(嶽肩志江・坪根由香里との共同執筆)、『ICU 日本語教育研究』2、2005 年

研究発表

1. 「日本語教育における教師の実践的思考に関する研究 (2) - ベテラン教師と新人教師の授業観察レポートの比較より -」(嶽肩志江・坪根由香里との共同研究), 平成 17 年度日本語教育学会春季大会, 2005 年 5 月 22 日 (予稿集 149-154 頁, 『日本語教育』127 号 100 頁) 於横浜国立大学
2. 「川端康成『雪国』に見られる話者の時間意識 - 原文と英訳との比較から -」(ワークショップ『『雪国』にみる日本語の認知言語学的特徴-中国語訳・英語訳と対照して-』の参加者の一人として、新村朋美・徐一平・守屋三千代・熊倉千之・盛文忠と共に参加), 第 6 回 (2005) 日本認知言語学会全国大会, 2005 年 9 月 18 日 (Conference Handbook 247-250 頁), 於お茶の水女子大学
3. 「時に関する日英対照」(『ワークショップ: 認知言語学と日本語学・日本語教育・日本文学の研究』に、池上嘉彦・新村朋美・徐一平・潘鈞・近藤安月子・守屋三千代・熊倉千之・盛文忠と共にパネリストの 1 人として参加) 北京日本学研究中心 20 周年記念シンポジウム、於北京日本学研究中心、2005 年 10 月 15 日 (予稿集 51-53 頁)

金山 泰子

研究論文

- 二宮理佳・金山泰子『『ええ』の機能についての一考察-『はい』との比較を通して-』『ICU 日本語教育研究』2、ICU 日本語教育センター、2006 年 3 月

黒川 美紀子

報告

1. 「「地球市民教育」を目指す日本語教育の試み-「上級 2 話し方・聴解」コース、インタビュー・プロジェクトの報告-」『ICU 日本語教育研究』2、ICU 日本語教育センター、2006 年 3 月